

市原市釈迦山古墳発掘調査報告書

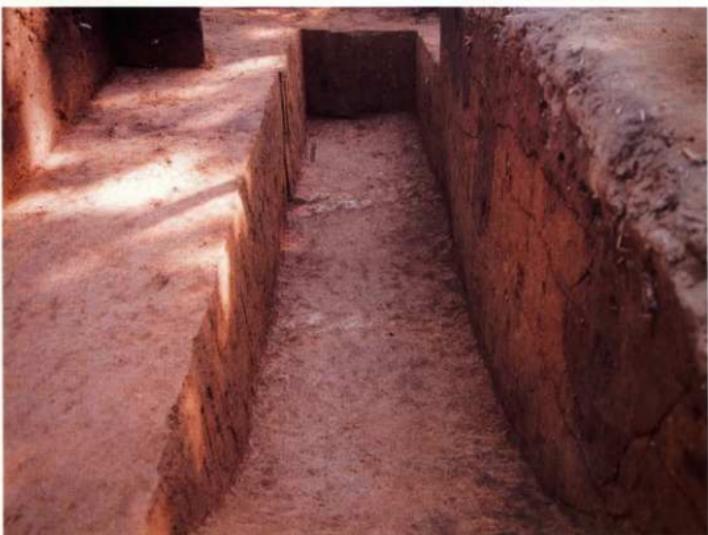
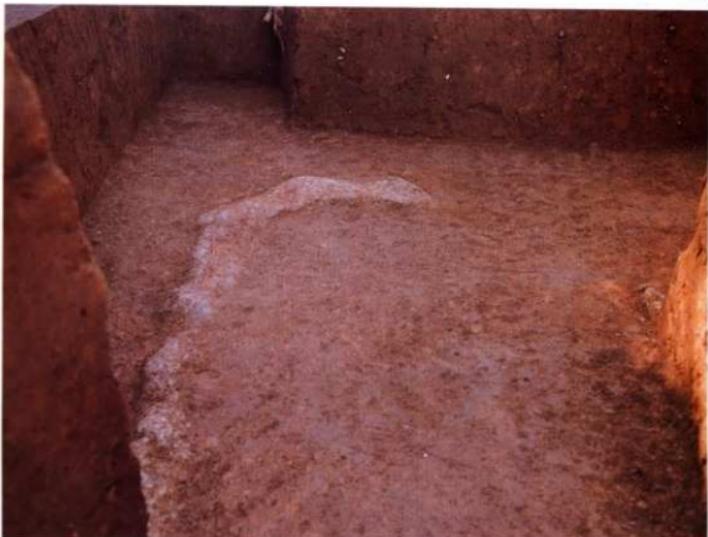
平成 7 年度

財団法人 千葉県文化財センター

いちはら しや か やま
市原市釈迦山古墳発掘調査報告書



卷頭圖版



粘土櫛検出状況

序

千葉県教育委員会では、平成元年度に県内に所在する古墳の詳細な分布調査を実施しました。それによれば、県内には八千基以上の古墳が所在し、東京湾沿岸、印旛・手賀沼周辺、九十九里沿岸、利根川下流域などの地域に集中的に分布している傾向が明らかになりました。これらの古墳は当時の有力者の墳墓ですが、集落や埋もれた田畠などとともに、私たちの故郷の成り立ちを物語る、かけがえのない資料ということができます。

ところが、こうした埋蔵文化財は、土地と密接に関連していることから、大小の開発事業によって深刻な消滅の危機に直面していることも事実です。失われた文化財を再び呼び戻すことはできません。このため、県教育委員会では、国庫補助事業として、平成2年度から県内主要古墳の保護・活用を図るために基礎資料の充実を目的として、順次確認調査を実施し、その成果を公表してきたところです。

今年度は、財団法人千葉県文化財センターに委託して、市原市駿迎山古墳の発掘調査を実施しました。この駿迎山古墳は、代々の上海上國造の墓所である姉崎古墳群に含まれ、県内では数少ない4世紀代に築かれた大型の前方後円墳として注目されていましたが、従来、その内容は全く明らかにされていませんでした。発掘調査の結果、後円部中央から埋葬施設である粘土椁が発見されるとともに、古墳築造時期の決め手となる土器も出土するなど、大きな調査成果を上げることができました。調査の内容は本文中に詳しく述べられておりますが、姉崎古墳群の中で最も古い古墳の一つであることも判明しています。

このたび、調査結果を報告書として刊行するにあたり、本報告書が学術資料として、また同時に、文化財の保護と活用の一助として、県民各位に活用されることを切望いたします。

最後になりましたが、本事業の実施に当たっては、文化庁をはじめ、市原市教育委員会、土地所有者の皆様から多大の御協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

平成8年3月22日

千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 鈴木 道之助

凡　　例

1. 本書は、千葉県教育委員会が国庫補助金を受けて行っている県内主要古墳発掘調査の報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、千葉県市原市姉崎字山王山2,204ほかに所在する駿遊山古墳（遺跡コード219-071）である。
3. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県教育委員会が財団法人千葉県文化財センターへ委託して実施した。
4. 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長西山太郎、市原調査事務所長森尚登の指導のもと、市原調査事務所調査係長小久賀隆史が下記の期間に実施した。

　発掘調査 平成7年10月2日～平成7年10月31日

　整理作業 平成7年11月1日～平成7年12月28日

5. 本書の執筆は、小久賀隆史が行った。
6. 調査の実施に当たっては、市原市教育委員会、土地所有者の濱田博氏及び宗教法人姉崎神社、出光興産株式会社千葉製油所の御協力を得た。
7. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1:25,000「姉崎」(NI-54-19-16-3)
 - 第2図 市原市役所発行 1:2,500地形図F-2

なお、駿遊山古墳の墳丘測量図は千葉県教育委員会所蔵の原図を編集したものである。
8. 駿遊山古墳周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
9. 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

本文目次

Iはじめに.....	1
1. 駿遊山古墳の位置と環境.....	1
2. 駿遊山古墳周辺の主要な古墳.....	1
3. 調査の概要.....	3
II遺構.....	6
1. 古墳の現況.....	6
2. A・Bトレンチ.....	6
3. Cトレンチ.....	9
4. Dトレンチ.....	9
5. 埋葬施設.....	10
III遺物.....	12
1. 古墳時代の遺物.....	12
2. そのほかの遺物.....	15
IVまとめ.....	17
1. 墳丘と周溝.....	17
2. 埋葬施設.....	17
3. 出土土器.....	20
4. 結語.....	21
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 駿遊山古墳と周辺の主要な古墳（1：25,000）.....	2
第2図 駿遊山古墳周辺地形図（1：2,500）.....	4
第3図 トレンチ配置図（1：600）.....	7
第4図 A・B・Cトレンチ実測図.....	8
第5図 Dトレンチ実測図.....	9
第6図 埋葬施設実測図.....	11
第7図 古墳時代の遺物（1）.....	13
第8図 古墳時代の遺物（2）.....	14

第9図	そのほかの遺物（1）	15
第10図	そのほかの遺物（2）	16
第11図	墳丘復原図（1）（1：600）	18
第12図	墳丘復原図（2）（1：600）	19

表 目 次

第1表	管玉計測観察表	15
-----	---------	----

図版目次

巻頭図版 粘土郴検出状況

図版1	駿遊山古墳周辺航空写真（1：10,000）
図版2	後円部墳頂（西から）・くびれ部からみた前方部・くびれ部の道（南から）
図版3	墓壙確認状況（北から）・Bトレンチ東側遺物出土状況
図版4	墓壙北側立上がり・墓壙東側立上がり・墓壙南側立上がり
図版5	粘土郴検出状況（北東から・北から・南から）
図版6	前方部北側（東から）・Dトレンチピット群検出状況（北から）・Dトレンチ調査状況（北西から）
図版7	出土土器（1）
図版8	出土土器（2）・鉄器・錢貨・管玉

I はじめに

1. 駿迦山古墳の位置と環境

駿迦山古墳は、JR内房線姉ヶ崎駅の南東約0.9kmの市原市姉崎字山王山2,204ほかに所在する。千葉県の中央部西側に位置する市原市の地形は、南部の丘陵、北部の洪積台地、そしてそれらを開析して流れる養老川による沖積低地の三つに大きく分けられる。養老川は、房総半島の分水嶺である房総丘陵の清澄山系に源を発し、市域南部を複雑な蛇行を繰り返しながら東京湾に注いでいる。中～下流域では河岸段丘が数段認められ、沖積低地部分には旧河道の痕跡を半月状に残している。河口では扇形に広がる大きな沖積平野が形成され、砂堆（洲）列が幾筋か認められる。この養老川は、広大な流域面積を有し、流域には多くの遺跡、そして古墳が存在している。河口の砂洲（堆）上に位置するわずかな古墳を除けば、その大半は台地縁辺部に立地している。古墳の总数は1,000基を超え、特に中～下流域には多数の古墳群が形成されている。これらの古墳群はいくつかのグループに分けることができる。中でも最下流域に存在する姉崎古墳群は50mを超える古墳が集中し、さらには100mを超える古墳が複数存在する唯一のグループである。こうしたことから、姉崎古墳群は後の上海上国を中心としたと考えられ、古くから注目されている。

駿迦山古墳はこの姉崎古墳群に含まれる。養老川の左岸に大きく広がる台地の最北端で、河口の沖積低地を臨むやせ尾根状をなす台地の先端部分に立地している。この台地は、養老川の支流である椎津川によって樹枝状に開析されたため複雑な地形となり、八つ手状の形状をなしている。台地の標高は約34m、沖積低地との比高差約27mを測る。なお、駿迦山古墳の年代については、かつて墳丘上で埴輪が採集されたことなどから、姉崎山王山古墳に近い時期とされたこともあったが、近年では多少年代観に幅はあるものの、未調査ながら、その立地や形態等から前期古墳という点で一致した評価が与えられている。

2. 駿迦山古墳周辺の主要な古墳

前述のように古くから注目されてきた姉崎古墳群であるが、その実態は必ずしも明らかではなく、また大型の開発が次々と進められる地域でもあるので、基礎的な資料の充実が望まれていた。平成5年度に実施された千葉県教育委員会の測量調査¹⁾によって、ようやく基礎的な資料が整い、姉崎古墳群は前方後円（方）墳10基、円墳27基、方墳1基で構成されていることが明らかとなった。これらの古墳のうち16基が現存している。以下に主要な古墳について触れてみたい。なお姉崎古墳群の範囲については諸説あるが、ここでは姉崎神社周辺の台地上及びその北側の低地に存在する古墳に限定してその範囲としておく。

姉崎天神山古墳は、台の大塚あるいは大塚とも呼ばれる前方後円墳で、養老川の沖積地を望む標高約28mの台地の縁辺部に立地している。全長約130mと復原され、県下第二位の規模を誇る。立地や前方部が低く幅も狭いことから4世紀後半から5世紀前半の年代が想定されているが、未調査のため詳細は明らかではない。県の史跡に指定されており、測量も以前に行われている²⁾。二子塚古墳は、養老川河口の標高約5mの砂洲上に立地する前方後円墳である。古くから度重なる盗掘や部分的な発掘が行われていたが、戦後になりようやく本格的な発掘調査が行われた³⁾。その結果、埋葬施設の詳細は不明であるが、前方部及び後



1 神明山古墳

2 紫嶺天神山古墳

3 二子塚古墳

4 姉崎山王山古墳

5 妙経寺古墳

6 鶴窪古墳

7 原1号墳

8 堀頭古墳

9 六孫王原古墳

第1図 神明山古墳と周辺の主要な古墳 (1 : 25,000)

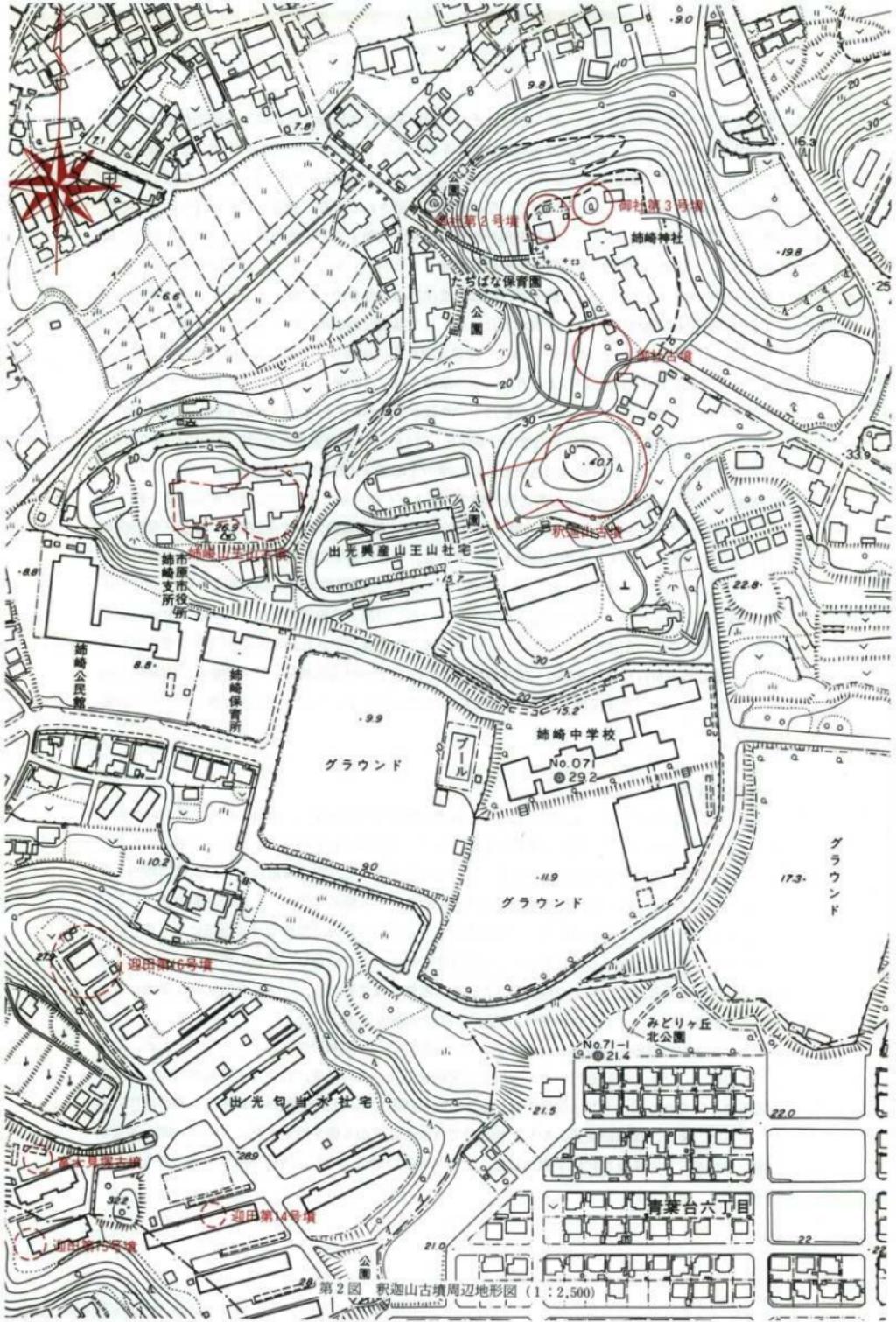
円部の墳頂から直弧文の線刻された石枕や銅鏡、そして銀製垂飾付き耳飾り等の豊富な遺物が出土した。また、円筒埴輪を伴っている。発掘調査が墳頂部のみを対象としていたため、墳丘や周溝にまで調査が及んでおらず、墳形や規模の確定にまで至っていないが、全長約103mで楕円形の周溝を持つと推定されている。5世紀前半から中葉の年代が与えられている。県の史跡に指定されており、測量も以前に行われている⁶⁾。鶴窪古墳（蓮ヶ窪古墳）は、椎津川の支谷を望むやせ尾根上に立地する前方後円墳である。昭和56年に確認調査が行われ、墳丘が二段築成で円筒・形象埴輪を伴うことが明らかとなった。全長約60mを測る。6世紀後半の年代が与えられている。六孫王原古墳は、椎津川の支谷を望む台地上に立地する前方後方墳である。昭和46年に発掘調査が行われ、古墳の設計尺度として高麗尺が使用されたことと、周溝が長方形となることが明らかとなった⁷⁾。全長約45mを測る。埋葬施設は既に破壊されていたが、横穴式石室であったとされている。7世紀後半の年代が与えられている。堰頭古墳は、椎津川の支谷を望む台地上に位置する前方後円墳である。全長約45mを測る。6世紀後半の年代が想定されているが、未調査のため詳細は明らかではない。その他、姉崎神社境内にも円墳が3基存在しているが、未調査のため時期等一切不明である。

また、既に消滅した古墳では、积迦山古墳と同じ台地の先端部分に姉崎山王山古墳が存在していた。昭和38年に発掘調査が行われ、全長69mの前方後円墳であることが明らかとなった⁸⁾。後円部の墳頂下約2mで主軸とほぼ平行して長さ9m、幅3.5mの粘土櫛が検出され、銀装環頭大刀や金銅製冠・胡簾・変形四獸鏡等多数の遺物が出土した。また、円筒埴輪も伴っている。6世紀前半の年代が与えられている。原1号墳は、椎津川の支谷を望む台地上に立地していた前方後円墳である。昭和46年に発掘調査が行われた⁹⁾。埋葬施設は木棺直葬と考えられ、大刀・刀子等が出土している。円筒・形象埴輪を伴っている。全長約80mに復原され、6世紀後半の年代が与えられている。その後、墳丘は削平されたが、昭和56年に墳丘下及びその東側で集落の調査が行われ、周溝の一部が検出されている¹⁰⁾。妙経寺古墳は、姉ヶ崎駅前の標高約5mの砂洲上に立地していた前方後円墳である。全長約55mと推定されているが、古くに破壊されたため詳細は不明である。

3. 調査の概要

今回の調査は、計画段階では、通常行われている古墳の確認調査と同様に、古墳の裾から周囲に発掘区を設定し、周溝の検出によって、墳形や規模を把握することを目的としていた。しかし、古墳の所在する土地が私有地であり、また、周辺に民家が近接していることもあって、実施段階に至り、古墳の周囲に発掘区を設定することを断念し、後円部の墳頂と前方部の北側という極めて限定された範囲を対象として、実態把握の手がかりを得ることを目的として調査することになった。後円部側では墳頂部にA・Bトレンチ、後円部からくびれ部に向かってCトレンチの計3本のトレンチを設定し、墳丘の構築状況、墳丘上の遺物の検出、そして埋葬施設の検出を目的とした。前方部側では北側にDトレンチを設定し、従来から人工的な整形と指摘されていたテラス状部分の成因と時期の把握を目的とした。

調査はまず、後円部墳頂から着手した。表土から30cm掘り下げた段階で管玉が1点出土したため、以後トレンチ内の排土のフリイがけを行いながら掘下げを継続した。その結果、計7点の管玉が出土した。これらの管玉は、いずれも表土下30cm前後の深さから散漫な状態で出土し、周囲からは粘土や他の遺物は検出されなかった。また、後円部墳頂のやや北側部分では表土直下から礫や近世の瓦、さらには寛永通宝が狭い範囲からかなりまとまった状態で出土した。土地所有者の話によると、後円部墳頂にはこの古墳の名



第2図 帆足山古墳周辺地形図(1:2,500)

称の由来と考えられる「お駅迦様」が戦前まで祀られていたということなので、それに関わる遺物と考えられた。さらに墳丘を掘り下げていくと、表土から60cmの段階で平面的に落込みが確認された。木根による擾乱もあり、確認されたのは部分的でプランは確定できなかったが、かなり長大なものと考えられた。墓壙の可能性も考えられたため、サブトレンチを設定しさらに掘り下げた。その結果、落込み確認面から約1m、表土から約1.6mの深さで黄白色粘土が検出された。さらに周囲を精査すると、約1.6mの幅で東西方向に広がりを持つことが明らかとなった。こうした状況から粘土構の可能性が考えられたので、その規模を把握するため周囲にもサブトレンチを入れた。その結果、東側でも黄白色粘土が一部検出された。この段階で既に調査は終盤を迎えていたが、可能な限り黄白色粘土の広がりを把握したいと考え、西側については想定される粘土構の長軸に当たる方向に沿って部分的な掘下げを行った結果、約5.7mの長さで検出することができた。こうして粘土構であることがほぼ確定した。しかし、東側については既にトレンチの排土の山の下になっており、排土を移動する場所もなかったので検出を断念した。また、粘土構内部の調査については、一切実施しなかった。

前方部北側の調査では、設定したトレンチをローム層まで掘り下げ、遺構の確認、土層の堆積状況の把握に努めた。ローム層上面でピット群が検出されたため、精査を行った。遺物は後円部墳頂に比べて少ないが、古墳時代の遺物のほかに平安時代の土師器や北宋錢が出土し、テラス状部分の時期を推定する手がかりとなった。その後すべてのトレンチを埋め戻し、現状に復して調査を終了した。

注1 千葉県教育厅生涯学習部文化課編 1994『千葉県重要古墳群測量調査報告書－市原市姫崎古墳群－』 千葉県教育委員会

2 千葉県教育厅文化課編 1980『千葉県記念物実態調査報告書Ⅰ』 千葉県教育委員会

3 大場磐雄・亀井正道 1951「上総国姫ヶ崎二子塚発掘調査概報」「考古学雑誌」37-3

4 千葉県教育厅文化課編 1990『千葉県記念物実態調査報告書Ⅱ』 千葉県教育委員会

5 中村恵次・沼澤豊・田中新史 1975『古墳時代研究II－千葉県市原市六孫王原古墳の調査－』

6 小出義治・甘粕健・久保哲三ほか 1980『上総山王山古墳発掘調査報告書』 市原市教育委員会

7 石井則孝ほか 1970『千葉県市原市姫ヶ崎町原一号墳発掘調査概報』 千葉県教育委員会

8 越川敏夫・宇佐美義治・小沢洋 1984『原遺跡 市原市姫崎・原1号墳周辺址及び集落跡の調査』 原遺跡調査会

II 遺構

1. 古墳の現況

墳丘は後円部が高く、前方部が低い（比高差4m）という前期古墳の特徴を良く残している。しかし、全体にわたって地形の改変が著しい。特に、前方部の墳裾はほぼ全周にわたって削平され、地形が大きく改変されている。西側は舗装道路によって大きく削平され、工事の際の法面整形によるものか、前方部先端は一見段築状をなしている。南側は土砂採取によって大きくえぐられ、その東側は姫崎神社の宮司である海上家の墓所となっている。また、墓所の東側も大幅に削平され、テラス状をなしている。さらに、前方部の北側には從来から人工的な整形と指摘されてきた曲輪状の段が、谷に向かって數段認められる。前方部墳頂は幅が狭く、くびれ部から先端部にかけてやや高さを増すもののほぼ平坦である。後円部は東側に隣接する民家の宅地造成によって大きく削平されている。また、南側も民家によって墳裾が一部削平されている。後円部墳頂は平坦面が広がり、また、斜面はかなり急なものとなっている。後円部墳頂は、土地所有者が戦時中煙にしていたことなどから、若干は削平されている可能性もあるが、確認された墓壙の規模から見て元來かなり広い墳頂部平坦面を有していたものと思われる。なお、墳丘のくびれ部には、古墳の南側から北側に抜ける幅1mほどの道が付けられている。

現在、墳丘及び北側斜面は山林となっており昼なお暗い状況であるが、後円部の墳頂は調査に入る直前の台風によって杉の木が何本か倒れ、やや明るい状況であった。

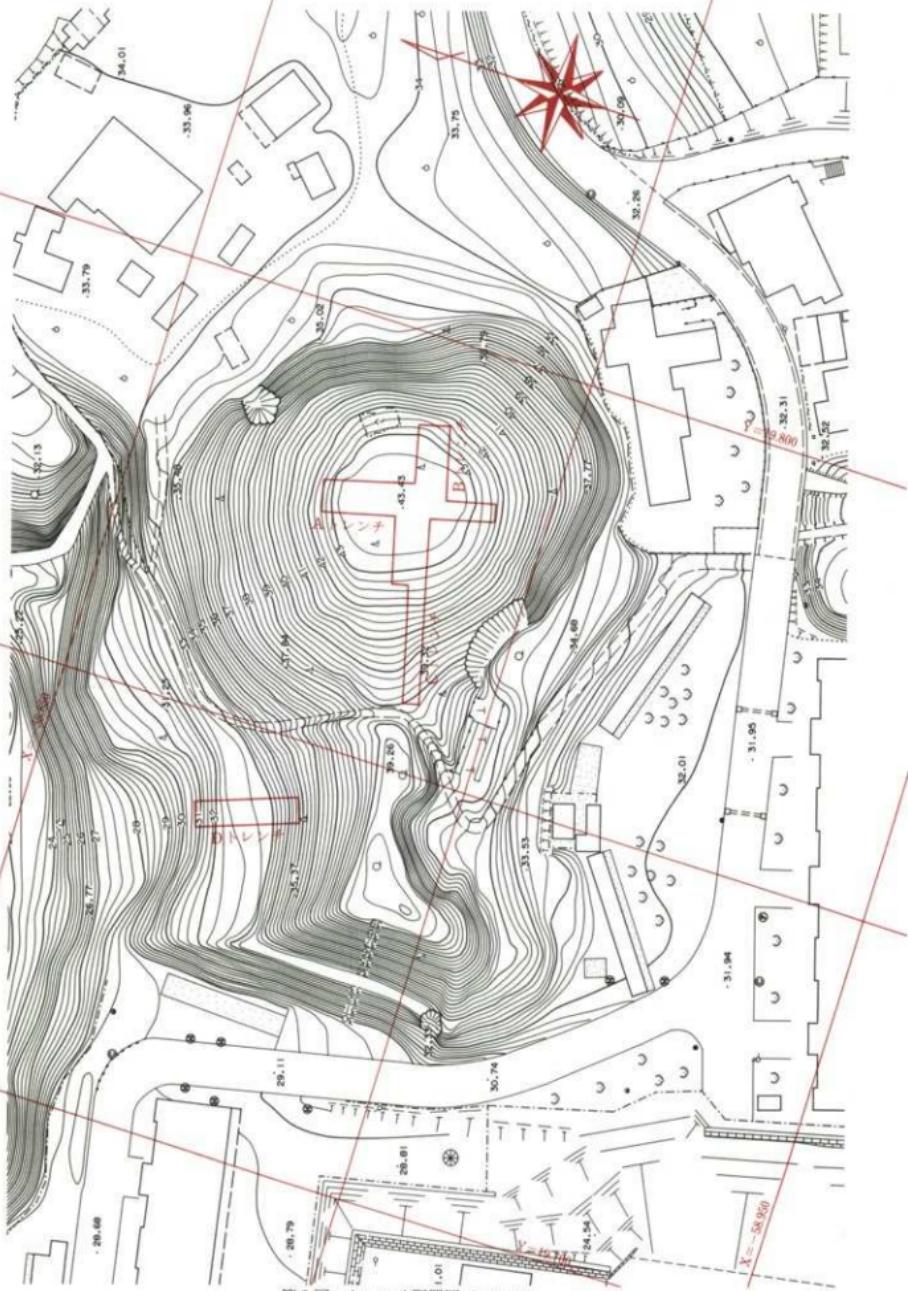
2. A・Bトレント（第4図）

後円部墳頂で直交するように設定したトレントである。ほぼ南北方向に向くのがAトレントで、ほぼ東西方向に向くのがBトレントである。

A・Bトレントとも墓壙の可能性が考えられた落込みが確認された段階から、埋葬施設全体の把握に主眼を置いたため、それ以外の部分については表土から50cmほどの深さまでしか掘り下げておらず、墳丘の構築方法等を知る手がかりは得られなかった。トレント内の土層は表土にしまりのない暗褐色土、その下に黒褐色土が堆積し、さらにその下に墓壙が掘り込まれる明褐色土が1.2m以上の厚さで盛られている。この明褐色土層は、ロームブロックと黒色土が互層状をなすもので、墓壙の埋土とは明らかに異なるものである。

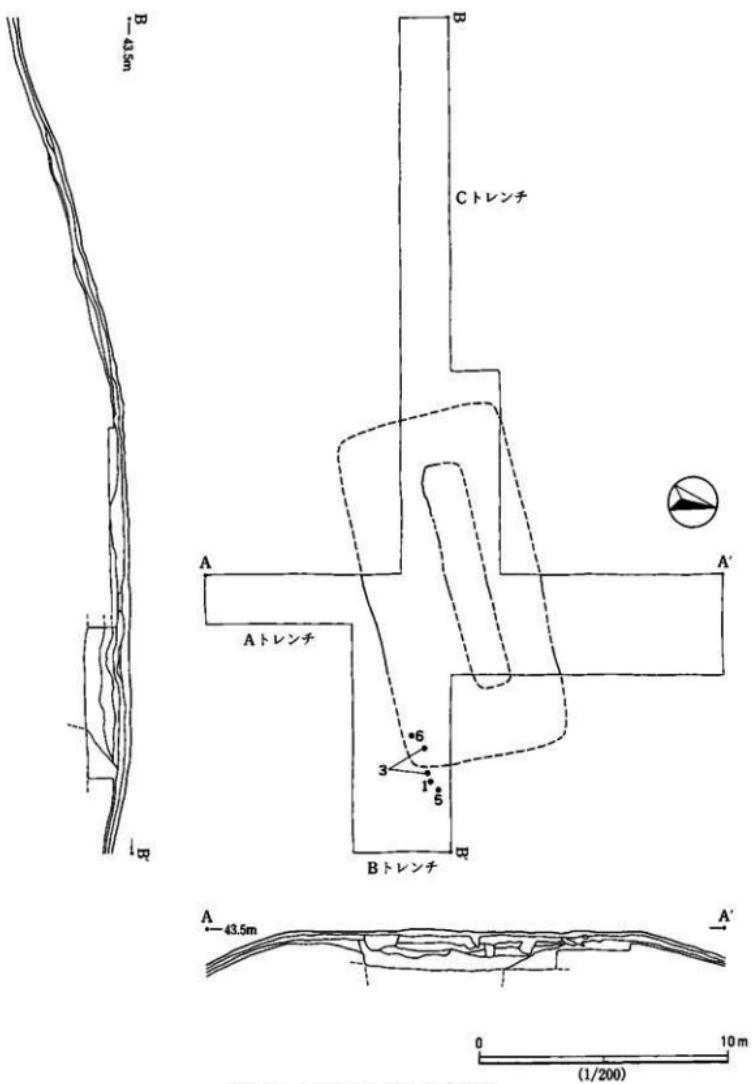
遺物はAトレントの南側、Bトレントの東側部分で古墳時代の土器がやまとまって出土した。埋葬施設との係わりで言えば、これは墓壙の東端部分の上面に当たる。出土した土器の点数は比較的多いが、トレント調査のせいもあって、復原できた個体は少ない。また、墳頂部のほぼ中央やや東側、表土から30cmほどの深さで管玉が1点検出され、以後フリイをかけながら調査を行った結果、計7点の管玉が検出された。埋葬施設の検出を重点に置いたため、管玉の詳細な出土状態を明らかにすることはできなかった。出土したレベルにやや差はあるものの、大まかな出土位置から考えると墓壙の上面（それも東側半分）を覆うような出土状況を復原することができる。

なお、Aトレントの北側では近世の瓦や礎・寛永通宝が、表土直下のレベルで狭い範囲からかなりまと



第3図 トレンチ配置図 (1 : 600)

また状態で出土した。これは、前述のように戦前まで墳頂部に存在していた「お駕迎様」に係わる遺物と考えられる。そのほか、埴輪や平安時代の土師器の破片も若干ではあるが出土している。



第4図 A・B・Cトレンチ実測図

3. C トレンチ (第4図)

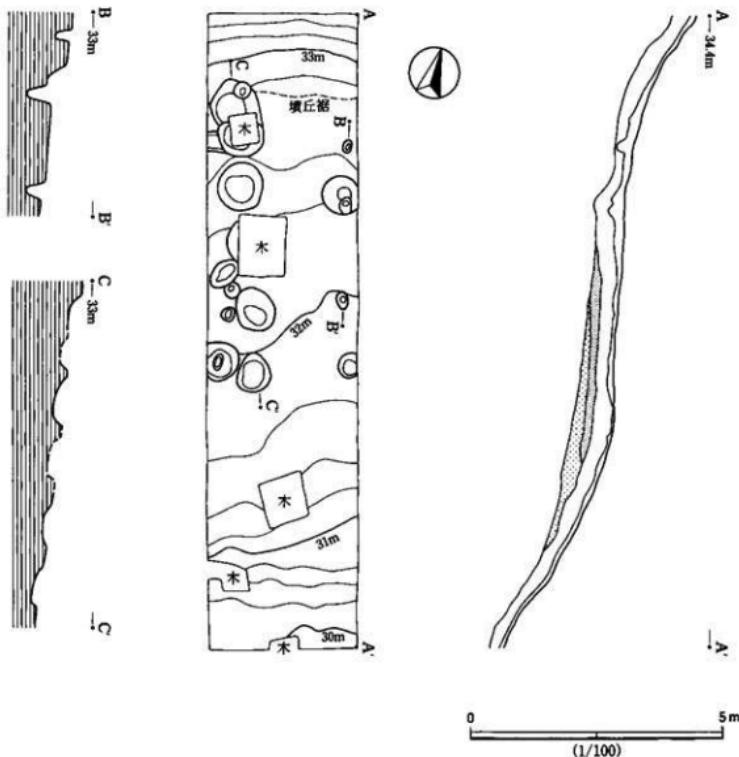
後円部墳頂からくびれ部にかけて設定したトレンチで、Bトレンチを西側に延長したものである。

トレンチは、50cm前後の深さまでしか掘下げを行っていないため、墳丘の構築方法等は不明である。トレンチ内の土層は墳頂部と同様で、表土はしまりのない暗褐色土、そして、その下に黒褐色土の堆積が見られる。

遺物は土器のみで、A・Bトレンチに比較して少なく、大半はA・Bトレンチと同時期で同一個体と考えられるものも多い。唯一後円部寄りで、S字状口縁台付甕の口縁部破片が出土しているのが目につく。

4. D トレンチ (第5図、図版6)

前方部北側の人工的な整形と考えられるテラス状部分の成因と時期の把握を目的として設定したトレンチである。地山であるローム層まで掘り下げた段階でピット群が検出されたので、可能な限り精査を行つ



第5図 Dトレンチ実測図

た。検出されたのは10数個のピットである。これらのピットは、径80cm前後で不整な円形のものと、径30cm前後で不整な橢円形をなすものとに大きく分けられる。深さは20cm～50cmで、径の小さいものの方が深い。トレンチ内の堆積土は4層に分けられた。図中にスクリーン・トーンで示した2層は、ローム粒を多く含むかなりしまりの良い暗褐色土である。地山の傾斜と合わないことと考え合わせると、人工的な盛土層と考えられる。

遺物は、墳丘部に比較して少ない。その大半は古墳時代の土器であるが、平安時代の土師器の量が墳丘部よりやや多い。また、埴輪も若干出土している。平安時代の土師器は、壺1個体を復原することができた。そのほか北宋銭が2枚出土している。

これらの遺構については、平面的な広がりを追うことができなかつたためその性格を確定することはできないが、建物等の可能性も考えられる。ただこのテラスは土層の堆積状況から、人工的に盛土・整地されていることは明らかである。そしてその時期は、土層断面の観察からすべてのピットが同一時期とは考えられないことと、出土した遺物に9世紀後半の土師器と北宋銭があることから、古墳築造後少なくとも2回にわたって利用されたものと考えられる。

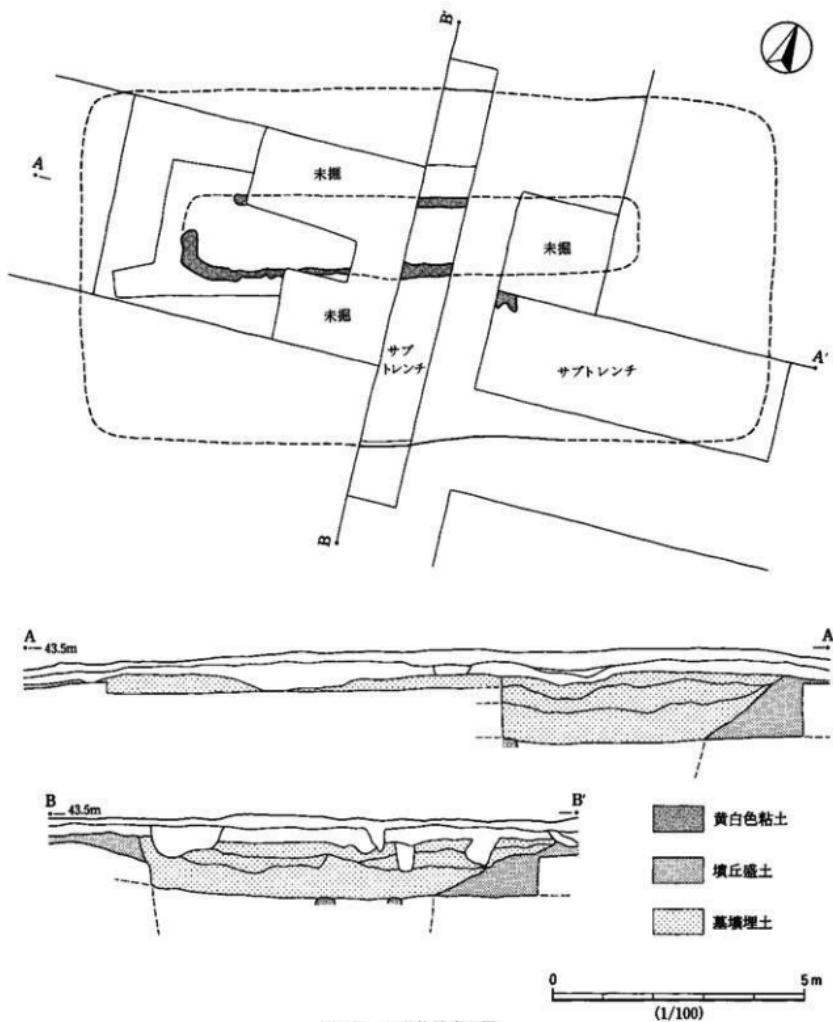
5. 埋葬施設（第6図、図版4・5）

A・Bトレンチを表土から60cmほど掘り下げた段階で、墳頂部の中央で落込みを確認することができた。あまり明確なものではなくプランも確定できなかったが、その位置から墓壙の可能性も考えられたので、サブトレンチを設定して掘下げを行った。この落込みの埋土はロームブロックを多く含む褐色土で、かなりしまった土であった。掘り下げていくにつれてロームブロック塊の大きさが増し、量も増え、1mほど掘り下げた段階で黄白色粘土の一部が検出された。黄白色粘土の上面にはロームブロック塊が貼り付けられた（置かれた）ような状況になっており、ロームブロック塊を剥がすと黄白色粘土が検出される状況であった。その後可能な限りサブトレンチを拡張し、黄白色粘土の広がりを押さえるよう努めた。その結果、この黄白色粘土は約5.7mの長さまで検出することができた。

わずかに検出されたプランと土層断面から墓壙の規模・形態を復原すると、幅は約7m、全長は約13.9m、やや隅丸の長方形をなすものと推定される。深さは、黄白色粘土が検出された段階で掘下げを中止したため不明である。壁の立上がりは北側と南側で平面的に、また、東側では断面のみであるが確認することができた。南側はほぼ垂直に、北・東側は緩やかに立ち上がる。墓壙の埋土はロームブロックを多量に含むもので、墳丘の盛土と大きく異なることから、墳丘が構築された後やや時間をおいて新たに基壙を掘り込み、粘土櫛設置後一気に埋め戻したものと考えられる。

確認された黄白色粘土は、幅10cm～25cm、長さ5.7mで、帯状に長方形に巡るものである。南端では一部粘土が途切れている部分が認められる。検出した粘土の連なり及び墓壙との位置関係から、粘土櫛の規模は、幅1.6m、全長は9.1mほどと推定される。墓壙及び粘土櫛は後円部の中央やや南寄りに位置するが、主軸は墳丘の主軸とは一致せず、N-60°-Eを示す。検出された黄白色粘土の間には、さらさらしたしまりのない黒色土が堆積していた。粘土櫛の内部は未調査のため、この黒色土が棺の腐朽に伴って陥没した被覆粘土上面の堆積土なのか、粘土櫛内の堆積土なのか、不明である。なお、推定される粘土櫛の範囲からややはざれて、東側でも黄白色粘土が40cm×30cmの範囲で検出されている。単なる粘土のブロックなのか、粘土櫛の一部を構成するものなのか、周囲を拡張することができなかつたため未確認である。

墓壙内からは、粘土被周囲も含めて遺物は一切出土していない。



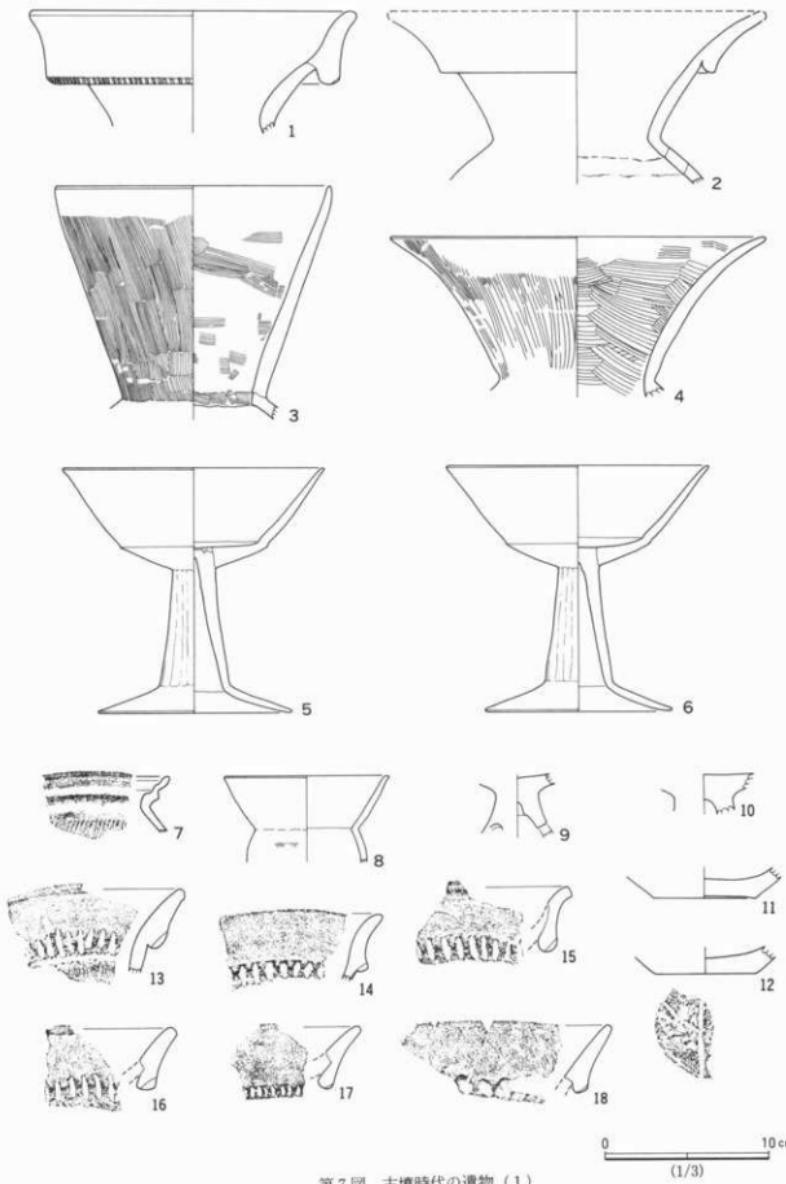
第6図 埋葬施設実測図

III 遺 物

今回の調査では、整理箱4箱の遺物が出土している。うち2箱は後円部墳頂にかつて所在した「お釈迦様」に係わると考えられる瓦や砾であり、古墳に伴うと考えられるのは残り2箱である。これらの遺物は土器が主体で、その大半は後円部に設定したA・B・Cトレンチ内で、墓壙を確認した面まで掘り下げる段階で出土したものである。そのほかわずかではあるが、墳丘の盛土内から縄文・弥生土器の破片が出土している。Dトレンチから出土した遺物はA・B・Cトレンチに比べて少ないが、大半はA・B・Cトレンチと同じ時期のものである。以下、古墳時代とそのほかの時代に分けて説明を加える。

1. 古墳時代の遺物（第7・8図、図版7・8）

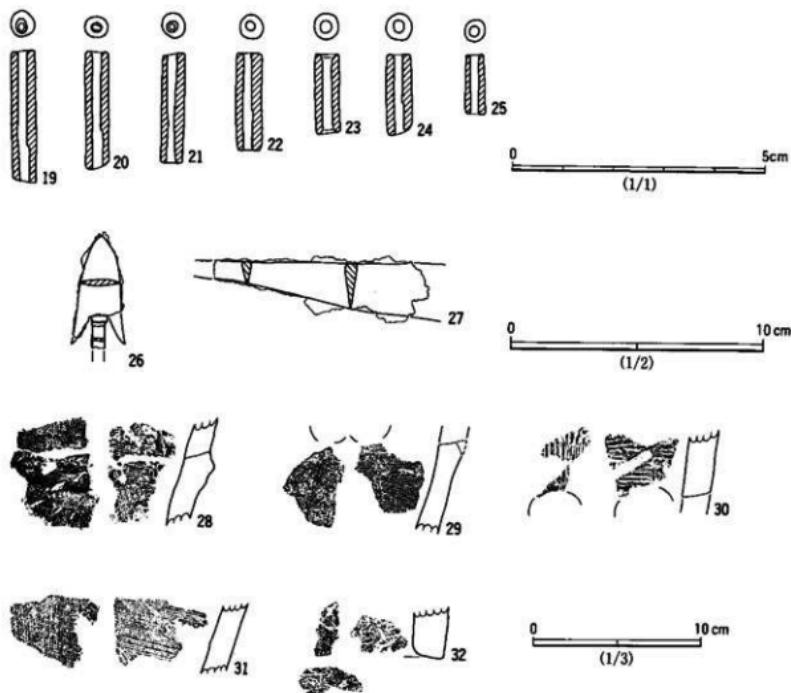
1から6はいずれもBトレンチの墳頂部よりやや東側、表土下約30cm～40cmのレベルでまとめて出土したものである。1・2はいわゆる複合口縁の壺である。1は頸部から外反する口縁の端部に直立気味に外反する幅の広い粘土帯を重ねたものである。口縁部下端には刻みが施される。25%ほどの遺存であるが、接合しないもののほかに同一個体と考えられる口縁部破片が存在する。同一個体とすれば80%ほどの遺存となる。内外面とも橙褐色をなす。2は頸部から大きく外反する口縁の端部に幅の広い粘土帯を重ねたものである。口縁部から頸部にかけてはハケナデされ、外面はさらに粗くヘラミガキされる。胴部外面はハケナデの後ナデが加えられる。胴部内面には輪積み痕が残る。内面は黒褐色、外面は橙褐色をなす。3は直口縁の壺である。やや内湾気味に直線的に開く口縁部を有するもので、大型の壺といふべきものである。口縁部は内外面とも細かい（10本／1cm）ハケ目が施された後ナデが加えられる。口唇部はヨコナデされる。胴部は外面ともナデが加えられる。胴部外面と口縁部内外面は赤彩される。4は口縁部が大きく外反する直口縁の壺である。外面は粗く規則性の無いハケ目が施された後、粗いナデが加えられる。内面はやや粗い（5本／1cm）ハケ目が施された後ナデが加えられる。外面と内面上半は赤彩される。5・6は下端に弱い稜を有し、やや内湾気味に立ち上がり、口唇部でわずかに外反する壊部を有する高壺である。脚部は柱状で屈曲して開く裾部を有する。壊部外面はヨコナデされ、内面には暗文に近いタテ方向のヘラミガキが加えられる。脚部は内外面ともヘラケズリされ、外面はさらにナデが加えられる。裾部はヨコナデされる。さらに、5にはナデの後ヨコ方向の細かいヘラミガキが認められる。また、5では壊部と脚部の接合法が観察できる。すなわち、ある程度乾燥した脚頂部の側面及び上面に粘土を加え成形するものである。ほぼ平坦な脚頂部には、ヘラによる刻みがわずかに観察できる。5は壊部の内外面が赤彩されるが脚部は器面の遺存状態が悪くて赤彩の有無は確認できない。6も遺存状態が悪いため、赤彩の有無は確認できない。5・6とも胎土は精選され、焼成も良好である。にぶい橙色をなす。7はCトレンチの墳頂側から出土したS字状口縁台付壺の口縁部破片である。口縁部はヨコナデされる。胴部外面にはタテ方向のクシ目ともいえる刻み込むようなハケ目が施される。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。8はBトレンチの墳頂部ほぼ中央から出土した壺で、口縁部と胴部は接合しないため図上で復原したものである。全体に丁寧なナデが加えられるが、胴部外面にはわずかにハケ目が残る。口縁部内面はヘラミガキされる。口縁部の内外面と体部外面には赤彩の痕跡が残る。9はDトレンチから出土した器台と考えられる破片で、脚部外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、そのほかの部分はナデが加えられる。赤褐色をなす。



第7図 古墳時代の遺物（1）

10はCトレンチの墳頂側から出土した高杯と考えられる破片で、内外面ともナデが加えられる。外面と杯部内面は赤彩される。脚部内面は明褐色をなす。11・12は壺の底部と考えられる。11はCトレンチのくびれ部側から出土したもので、外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、内面はナデが加えられる。内外面とも赤彩される。12はAトレンチの墳頂部ほぼ中央から出土したもので、内外面ともナデが加えられ、外面には木葉痕を有する。淡褐色をなす。13から18は複合口縁の壺の破片で、いずれも口縁部下端に刻み（押捺）を施ものである。内外面ともヨコナデが加えられるが、さらに外面には部分的にヘラミガキが加えられる。胎土や調整はほぼ共通するが、口縁部の開き具合や刻み（押捺）が微妙に異なるものである。13・14・16はAトレンチの墳頂部ほぼ中央、15・17・18はCトレンチの墳頂側から出土したものである。

19から25は管玉である。26は長頸腸抉長三角式鉄鏃である。遺存長4.3cm、最大幅2cm、厚さ0.25cmを測る。重さ3.85g。木質は遺存していないが、付け根に巻いた樹皮が遺存している。27は刀子の破片と考えられる。遺存長8.6cm、最大幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。重さ18.06g。鉄器はいずれもBトレンチの西側、表土下約50cmから出土したものである。28から32は埴輪の破片である。28は突帯が遺存しているものである。突帶の断面はM字形をなすが、突出度は低い。29・30は円形の透し孔の一部が遺存している。32は底部である。埴輪の量は極めて少なく、出土状況もまとまったものではない。



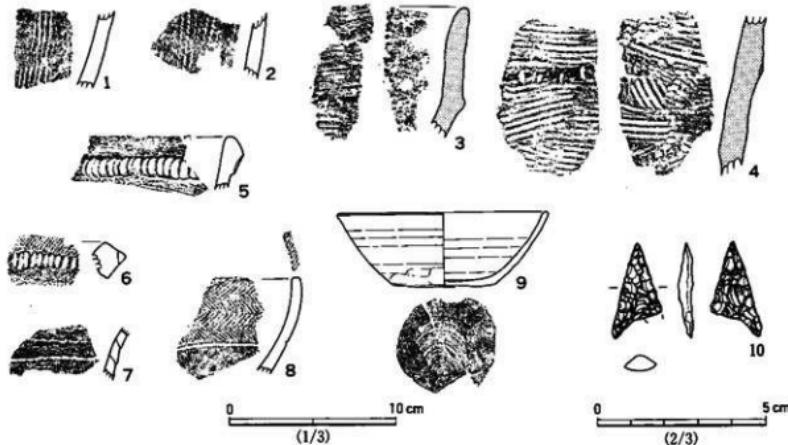
第8図 古墳時代の遺物（2）

番号	石 材	長さ mm	幅 mm	孔径 mm	重量 g	備 考
19	蛇紋岩	25.5	4.8	2.0	1.12	両面穿孔。フリイにより出土。
20	蛇紋岩	23.0	4.8	2.0	0.96	両面穿孔。フリイにより出土。
21	蛇紋岩	21.5	4.8	2.1	0.88	両面穿孔。フリイにより出土。
22	蛇紋岩	19.0	5.0	1.9	1.05	両面穿孔。フリイにより出土。
23	蛇紋岩	15.5	5.0	2.4	0.65	両面穿孔。
24	蛇紋岩	15.5	5.35	1.9	0.80	両面穿孔。フリイにより出土。
25	蛇紋岩	11.4	4.1	1.8	0.30	両面穿孔。フリイにより出土。

第1表 管玉計測観察表

2. そのほかの遺物 (第9・10図、図版8)

1～5は縄文土器である。1・2は条間のまばらな撚糸文が縦位に施される。3は内外面ともに条痕調整が施され、口唇部には多截竹管もしくは籠状工具による刻みが施される。4も内外面ともに条痕調整が施されるものであるが、隆帶上には多截竹管による連続刺突文が施される。5は口縁下の紐線上に連続爪形文が施される。6から8は弥生土器である。6は壺の口縁部で口唇部に細繩文が施され、下端には縄文原体による押捺が加えられる。内面は赤彩される。7は甕で輪積痕を残す。8は鉢と考えられる。口唇部には細繩文が加えられる。口縁部には羽状繩文が2段に施され、その下が沈線で区画される。9はDトレンチから出土した土器器の坏で、底部は90%、体部は20%が遺存する。口径12.5cm、底径6.2cm、器高4.5cmを測る。外面体部下端は手持ちヘラケズリされる。底部には回転糸切り痕が認められ、周縁部は手持ちヘラケズリされる。焼成良好で褐色をなす。10は黒曜石製の石鏃で、全面に細かい調整加工が施されている。重さ1.05g。11・12はDトレンチから出土した北宋銭である。11は天聖元年(1023年)初鑄の天聖元宝である。重さ2.42g。12は熙寧元年(1068年)初鑄の熙寧元宝である。重さ2.43g。



第9図 そのほかの遺物 (1)



第10図 そのほかの遺物 (2)

IV まとめ

1. 墳丘と周溝

前述のように、墳丘はかなり後世の改変を受けている。残念ながら今回の調査では、墳丘の周囲にトレーナーを設定できなかったため、本来の形態を復原する手がかりはほとんど無いに等しい。したがって、ここではあくまでも暫定的なものとして、Dトレーナーで得られた墳裾に関するわずかな情報と地表面からの観察結果とを併せて、おおよその復原図を作成してみた（第11・12図）。後円部は比較的遺存が良く、本来の形態をほぼ復原できる。しかし、前方部は前述のように地形の改変が著しいので、形態の復原には困難が伴う。ここでは、比較的良く遺存していると思われる前方部墳頂の南西側コーナー部分を基準に復原してみた。長さについては根拠はほとんど無いが、墳丘西側の道路の工事以前の地形図を見る限り、そう長い前方部は復原できそうにない。また、現在段築状をなしている前方部西側はかなり傾斜が急であることと、前方部が左右非対称に過ぎることから、本古墳の前方部は墳丘の南側から西側へ回り込む道路工事の際に一部削平され、その後の法面整形時に段切りされたものと考えられる。なお、この復原図では墳丘の築造企画についてはほとんど考慮していない。

この復原図から得られる駿遊山古墳の規模は、以下のとおりである。

全長	93m	主軸方位	N-73°-E
後円部径	57m	後円部高さ	12m
くびれ幅	24.5m	くびれ高さ	7.5m
前方部長	36m	前方部高さ	8m
前方部幅	32m		

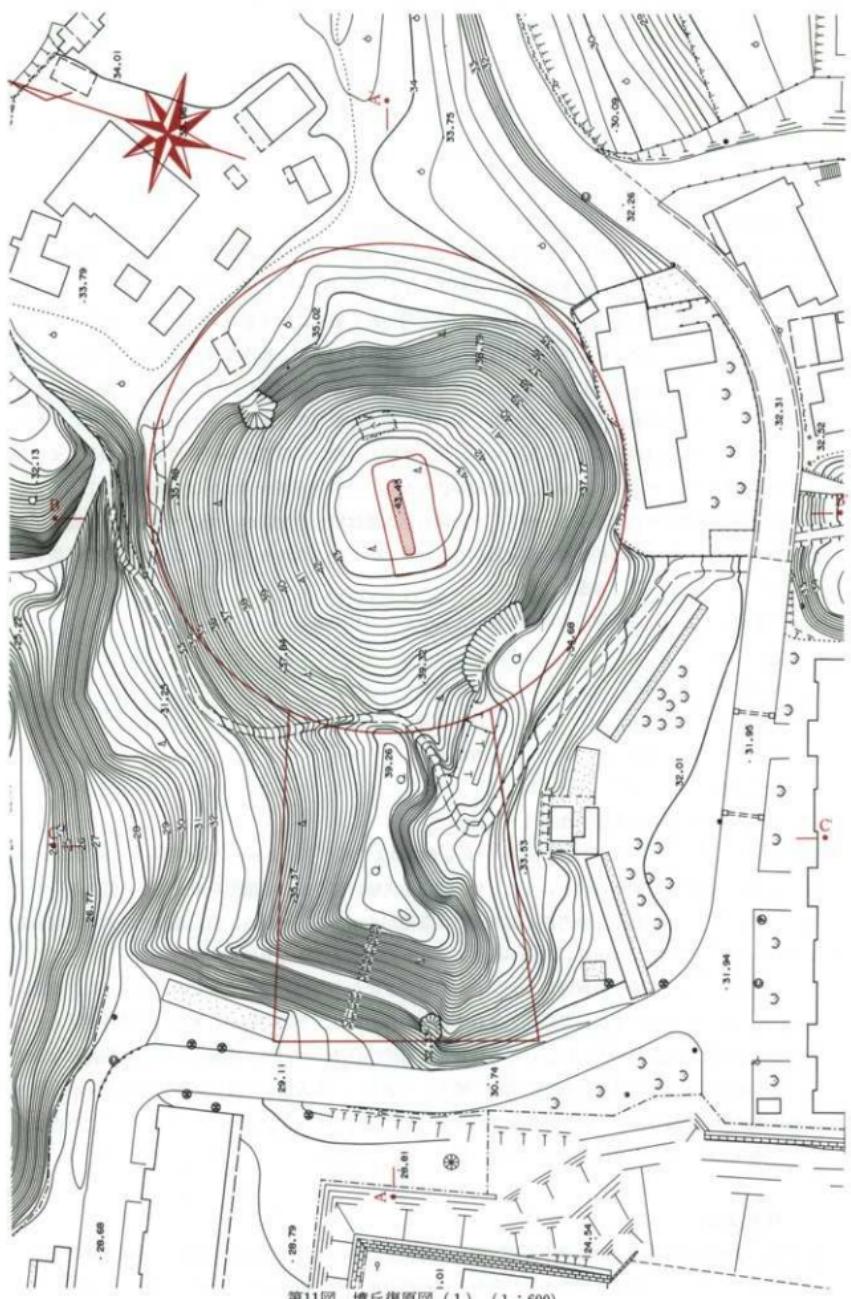
後円部墳頂と前方部墳頂の比高 4m

墳丘の構築方法については、設定したトレーナーを地山面まで掘り下げなかったため明らかにはできない。ただ、丘陵上に立地する前期古墳ということで、地山を大幅に削り出して墳形を整えてから盛土を行うといったことも十分考えられる。後円部と前方部の比高差が4mあることから、前方部はその大半が地山整形によるもので、後円部が4m高い部分が盛土によるものと考えることもできよう。

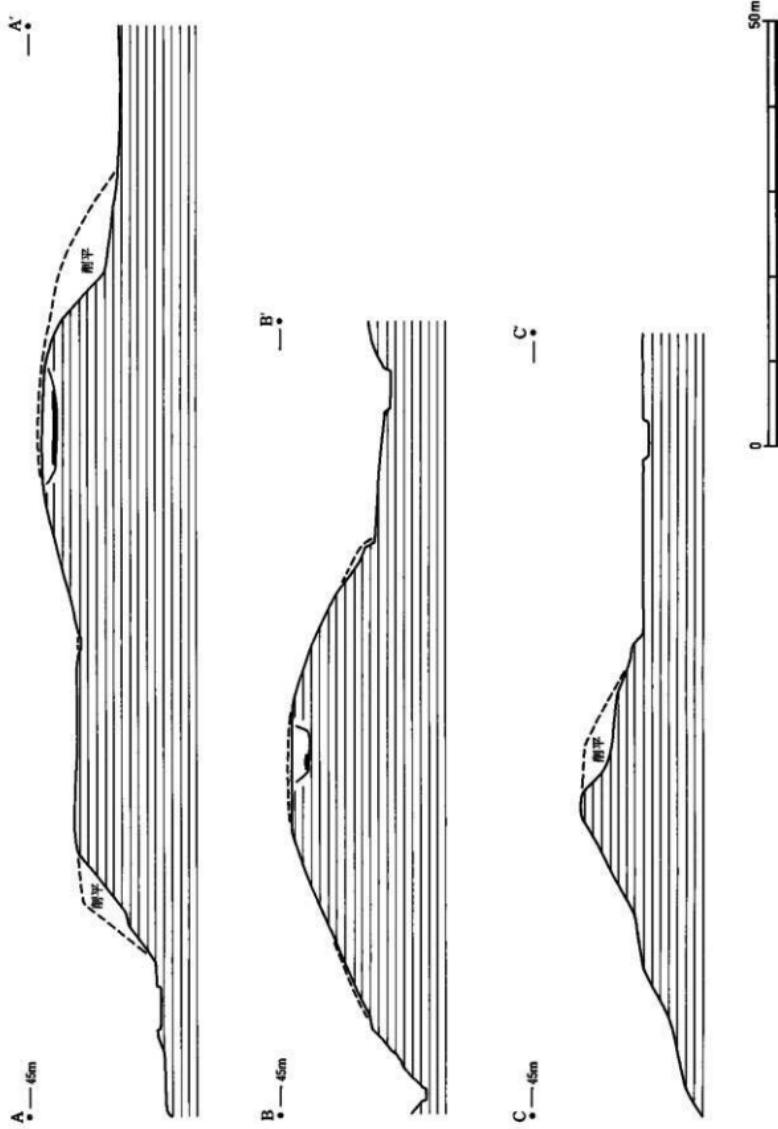
また、周溝についても墳丘の周囲にトレーナーを設定できなかったため確認できなかった。ただ、測量図を見る限りでは、後円部の東側に等高線の乱れている部分があり、その位置から周溝の可能性が考えられる。そして、墳丘の南側から西側にかけても存在した可能性は高い。ただ、北側については斜面になっているので周溝が存在する可能性は低い。前期古墳として著名で、本古墳とほぼ同時期に確認調査が実施された長生郡長南町能満寺古墳では、不定形で掘込みの浅い周溝が巡っている¹⁾ということなので、本古墳の場合も同様の周溝である可能性も考えられる。

2. 埋葬施設

本古墳の埋葬施設は後円部のほぼ中央に位置し、頭位を北東に向か長大な墓壙を有する粘土構である。この墓壙は土層観察により墳丘がほとんど盛り上げられた後、やや時間を経て新たに掘り込まれたもの



第11図 墳丘復原図(1) (1:600)



第12図 墓丘復原図（2）（1:600）

である。そして、粘土構築後一気に埋め戻されている。墓壙を有しないという点では異なるが、粘土構の規模は木更津市手古塚古墳³⁾のそれとほぼ同規模である。墓壙は壙底まで掘り下げなかったため、墓壙と粘土構の関係、すなわち壙底が平坦なのか、壙底に直接粘土が敷かれているのかといったことについては一切不明である。また、墓壙の壁の立上がり（特に北西側）の状況からすると、二段墓壙の可能性も考えられる。粘土構内の棺の構造も不明ではあるが、一応割竹形木棺と考えておきたい。ただ、木棺の上面に被覆粘土が存在していたかは明らかにできなかったが、粘土の範囲内で検出された土はさらさらしたしまりのない黒色土で、その上面の土とは明らかに異なるものである。さらに、これは姉崎山王山古墳の粘土構内の土（淡黒褐色腐蝕土とされている）と似ていることから、この黒色土は構内の土の可能性が高い。その場合、本古墳の埋葬施設は、粘土構というよりは被覆粘土の存在しない粘土床というべき構造のものとなる。また、検出された粘土の南端に一部途切れる部分が認められる。手古塚古墳に見られたような排水溝につながる部分の可能性も考えられる。

3. 出土土器

今回の調査では、後円部から比較的多くの土器が出土している。そのうち時期がわかる程度に復原できたのは、第7図に示した土器のうち1から6の6点である。これらのうち本古墳の時期を知る手がかりとなるのは、大型の壙（3）と高坏（5・6）の3点である。そして、破片ではあるがS字状口縁台付甕も参考となる。

こうした大型の壙の出土例を見てみると、たとえば佐倉市岩富漆谷津遺跡110号住居跡³⁾、成田市公津原Loc39遺跡005号跡、Loc40遺跡030号跡⁴⁾、市原市番後台遺跡019号住居跡⁵⁾等に類例がある。これらの遺跡では、小型丸底土器や小型器台と共に共存している。小型丸底土器、小型器台は有段口縁の坏を加えて小型精製土器群と呼ばれ、これらの土器が壙うのが布留式土器のメルクマール⁶⁾とされている。また、小型丸底土器は存在するものの、小型器台が次第に減少していく時期に定型化するという指摘⁷⁾もある。

2点出土した高坏は、全くといって良いほど同じ器形で、さらに同じ調整を施したものである。その製作技術は畿内の布留式土器における精製器種の製作技術⁸⁾と同一のものである。こうした器形の高坏の出土例を見てみると、市原市土字遺跡66号住居跡⁹⁾、成田市公津原Loc40遺跡019B・031号跡等に類例がある。土字遺跡66号住居跡では、小型丸底土器と布留系小型器台とされているX型の器台と共に共存し、公津原Loc40遺跡019B号跡では、小型丸底土器・X型の器台とまた、031号跡では小型丸底土器と共に共存している。こうした壙部下端に稜を有し、柱状の長い脚部で裾が屈曲して開く高坏は、畿内系とされているもので、布留II式の段階に東日本に波及してきたものとされている¹⁰⁾。

S字状口縁台付甕はその特徴からC類¹¹⁾と考えられ、口縁端部がやや肥厚していることからC類の中でも新段階に属するものである。C類は東海地方の編年の廻間II式の終末からIII式いっぱいの幅でたらえられている¹²⁾。

以上のことを総合すると、今回の調査で出土した土器群は、畿内では布留式の範疇に入るものである。大型の壙やS字状口縁台付甕はやや古い様相を示すが、2点出土した高坏の器形や製作技術から布留式の中の布留II式からIII式¹³⁾に相当するものと考えられる。東海地方の編年では、廻間III式の後半から松河戸式に相当する。南関東の編年では、4世紀後半とされる古墳前期II段階後半からIII段階¹⁴⁾に相当する。従来の編年ではいわゆる五領式の後半に相当する¹⁵⁾。

4. 結語

今回の調査では、後円部の墳頂に入れたトレンチによって、古墳の築造時期を知る手がかりとなる土器を確認し、さらに埋葬施設を確認することができた。埋葬施設は粘土構と考えられる。粘土構は、関東地方の前期古墳では木炭構に統一して出現する（いわゆる五領式後半）埋葬施設とされている¹⁸⁾。また、土器の示す様相も、大型の壠や畿内系の高環等から、いわゆる五領式後半としてよいものである。棺の構造を知ることはできなかったが、仮に割竹形木棺であるとすれば、関東地方に割竹形木棺が採用される時期に畿内系土器の流布が見られるという指摘¹⁹⁾もあり、本古墳における畿内系と考えられる柱状高環（器形のみならず製作技術が畿内の布留式土器と強いつながりを有している）の存在は、本古墳成立時の政治的、社会的背景を考える上で重要である。いずれにしても、県内の前期古墳の中では、同じような埋葬施設と考えられる木更津市手古塚古墳に近い時期と考えられる。

姉崎古墳群は、大型の古墳が集中する古墳群として古くから注目されてきた。発掘調査もある程度行われており、古墳群内の歴史的変遷についてもほぼ明らかとなっている。しかし、姉崎古墳群の成立時の様相は、古墳群内で古式とされる古墳の内容が明確でないため、意見の分かれるところであった。今回の調査では、こうした問題に新たな資料を提供することとなった。

今回の調査の結果、埋葬施設や土器の様相から、本古墳の築造時期は4世紀後半と考えられる。したがって、姉崎古墳群内で調査された古墳の中では、最も古い古墳であることが確実となった。ただし、群内最大の姉崎天神山古墳との新旧関係については、姉崎天神山古墳が未調査であるため判断できない。時期的には從来想定されてきた年代とほぼ変わりはないものの、埋葬施設の確認によって、本古墳が房総半島において手古塚古墳と並ぶ最古段階の定型化した大型前方後円墳であることが明確なものとなった意義は大きい。

注1 財団法人長生郡市文化財センター 1995『能満寺古墳現地説明会資料』

2 杉山晋作 1973『千葉県木更津市手古塚古墳の調査速報』『古代』56

3 有沢要ほか 1983『岩富漆谷津・太田宿』 佐倉市教育委員会

4 白石竹雄・天野努 1981『公津原II』 千葉県教育委員会

5 藤崎芳樹 1982『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』 財団法人 千葉県文化財センター

6 立花実 1992『東日本の屈曲口縁鉢』『西相模考古』1

7 滝沢亮 1981『南関東における古式土師器の様相』『物質文化』36

8 次山淳 1993『布留式土器における精製器種の製作技術』『考古学研究』40-2

9 柿沼修平・村山好文ほか 1979『土字』 日本国文化財研究所

10 比田井克仁 1983『古墳時代前期高環考－南関東地方を理解するために－』『古代』74

11 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

12 比田井克仁 1993『東国における外来土器の展開』『考古論集』久保哲三先生追悼論文集

13 米田敏幸 1994『庄内・布留式期の畿内と関東』『庄内式土器研究』V

14 比田井克仁 1994『南関東における庄内式併行期前後の土器移動』『庄内式土器研究』V

15 大村直 1994『戸張一番割遺跡の變形』『史館』25

16 大村直 1982『東国における前期古墳の再評価』『物質文化』39

17 岩崎卓也 1988『埋葬施設からみた古墳時代の東日本』『考古学叢考 中巻』

写 真 図 版





後円部墳頂（西から）



くびれ部からみた前方部



くびれ部の道（南から）



墓壙確認状況（北から）



Bトレンチ東側遺物出土状況



Bトレンチ東側遺物出土状況



墓壇北側立上がり



墓壇東側立上がり



墓壇南側立上がり



粘土櫛検出状況（北東から）



粘土櫛検出状況（北から）



粘土櫛検出状況（南から）



前方部北側（東から）

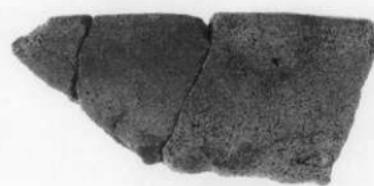


D トレンチビット群検出状況
(北から)



D トレンチ調査状況（北西から）





報告書抄録

ふりがな	いちはらししゃかやまこふんはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	市原市駒込山古墳発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第293集						
編著者名	小久賀隆史						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地の2				TEL.043-422-8811		
発行年月日	西暦1996年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
しゃかやまこふん 駒込山古墳	ちばけんいちはらし 千葉県市原市 あねさきあざさんのさん 姉崎字山王山	12219	071	35度 28分 52秒	140度 3分 5秒	19951002 19951031	200 国庫補助事業による学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
駒込山古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 粘土櫛	土師器・管玉・鉄鏃・刀子	後円部墳頂で粘土櫛が確認された。		

千葉県文化財センター調査報告第293集

市原市釈迦山古墳発掘調査報告書

平成8年3月29日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市中央区都町2丁目5番5号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。